要望演題8
心筋炎

座長:
磯松 幸尚 (横浜市立大学)
森 一博 (徳島県立中央病院)
Thu. Jul 16, 2015 9:00 AM - 9:50 AM 第8会場 (1F シリウス B)
I-YB8-01～I-YB8-05
所属正式名称：磯松幸尚(横浜市立大学医学部　外科治療学)、森一博(徳島県立中央病院　小児科)

[I-YB08-01]心臓 MRIによる急性心筋炎後遠隔期の遅延造影の意義

○藤野 光洋[1], 川崎 有希[1], 中村 香絵[1], 佐々木 赳[1], 江原 英治[1], 村上 洋介[1], 吉田 修一朗[2], 吉田 葉子[2], 鈴木 嗣敏[2]
(1.大阪市立総合医療センター　小児循環器内科,　2.大阪市立総合医療センター　小児不整脈科)
Keywords:急性心筋炎, CMRI, 遅延造影

【緒言】心臓 MRI(CMRI)で、心筋炎の遠隔期にみられる遅延造影(LGE)は心筋線維化を示す所見とされ、成人領域では LGEと長期予後との関連が報告され始めている.【目的】中長期経過した小児急性心筋炎における LGEの臨床的意義を検討する事.【対象と方法】対象は1999年６月から2013年7月に急性左心不全を呈し当院で急性心筋炎と診断され集中治療をうけた6例(女2).発症年齢は中央値(最大値-最小値)で1歳(10か月-13歳). 経過観察期間 は86（19-129）か月であった. 発症時 LVEF 23.1(10-37)%で、5例は ECMOが施行されていた.発症後、65(3-133)か月時に Phillips社製 Intera Achieva 1.5Tを用いて施行した CMRI所見と臨床経過を後方視的に検討した.【結果】 LGE陽性は6例中４例で、 ECMO施行例は３例だった. 心筋炎発症後86(33-115)か月で、 LVEF 55.4(51.0-68.2)%、4例とも心不全治療を継続されていた.うち2例で心機能が正常化し治療を中止した後に、再度心機能が悪化し、再治療されていた. 1例は ACE阻害薬とβ遮断薬等により LVEF 65%まで改善したが、その後、外来自己中断した結果、発症3年後に LVEF 48%まで悪化し心不全治療が再開されていた.もう１例は、心電図異常(CRBBB)と PVC残存例で、 LVEFは一旦正常化したが、発症後9年経過時点で心機能再悪化したため ACE阻害薬とβ遮断薬が開始されていた. 一方、 LGE陰性の2例では、１例で心電図異常(CRBBB)が残存するものの2例とも心機能正常で急性期以降無治療で経過していた. 【結論】 LGE陽性例では、長期に心不全治療を要していたり、治療中止後に心機能の再悪化がみられた. 成人領域では、 LGEを遠隔期死亡率の予測因子とする報告もあり、小児心筋炎後においても LGEの有無を確認する有用性が示唆された.

©Japanese Society of Pediatric Cardiology and Cardiac Surgery